西照

西照寺寺報「さいしょう」
第２７号
2010年10月4日
発行　浄土真宗本願寺派　西照寺
高岡市吉久２丁目４－40
西照寺ホームページ　nisitera.eek.jp

報恩講勤修

左記のとおり今年度の報恩講お勤めいたします。
お参りくださいませ。

おつとめの時間

十月　二十一日(木)　午後二時(逮夜)～
　　午後七時(初夜)～
　　二十二日(金)　午前九時半(満日中)～

布教使　圓山　清　師(氷見市布施　法順寺住職)

西谷山　西照寺

親鸞聖人750回大遠忌法要　高岡教区新湊組団体参拝募集

◇ 期　　日　平成23年6月9日（木）～6月10日（金）
◇ 募集人員　３５０名
◇ 会　　費　４２,０００円（会費には五木ひろし御園座公演観劇料を含む
◇ 宿泊ホテル　長島温泉（ホテルオリーブ）TEL0594-45-1111
◇ 申込締切日　平成23年2月末日（帰敬式や大谷本廟への分骨もできます）
◇ 申込問い合せは、西照寺まで　　0766-84-0705

正信偈のはなし　第四話

建立無上殊勝願（無上殊勝の願を建立し）
超発希有大弘誓（希有の大弘誓を超発せり）
五劫思惟之摂受（五劫これを思惟して摂受す）
重誓名声聞十方（重ねて誓ふらくは、名声十方に聞えんと）

大無量寿経には、法蔵菩薩が、あらゆる生あるものを救いたいと諸仏に超え優れた願いを発され、人智では及びもつかない永い間思惟を重ね、それが完成して阿弥陀仏となり自らの浄土（国土）を建立された。

何処が諸仏に超え優れているかというと、善行を積み、出家して修行することができないものも、仏法に背を向けるものも、非難するものも、すべてのものを救うという点にあります。

そして、その願いと成就のすべを念仏に込めてあらゆる世界に届けられた。

我が呼び声（南無阿弥陀仏）を聴き、阿弥陀仏の浄土に生まれたいと願って念仏するものは、必ず浄土に生まれて、さとりをひらくことができるのである。と説かれています。

さて、この物語をどのように受け止めることができるでしょうか。

親鸞聖人は、この法蔵菩薩の物語が説かれている大無量寿経のなかに、仏教の究極の真実を見出され、浄土真宗の根本聖典とされました。

その論拠として、聖人の主著である「教行信証」（本典）の教巻には、ただ一つのことが挙げられています。

それは、この経典が説かれる経緯です。

ある日何時も釈尊に従って使えていた弟子の阿難が、釈尊のただならぬ様子に気づきます。経典には「光顔巍巍」（顔がおごそかに輝いている様子）と書かれています。

私たちの日常でも、相手の顔色を見て、悩みがあり心が落ち込んでいるのか、うれしい事があったのか、自ずと分かることがあります。

普段見たこともない様子に阿難は、

「世尊、今日は喜びに満ちあふれ、お姿も清らかで、そして輝かしいお顔がひときわ気高く見受けられます。わたしは今日までこのような神々しいお姿を見たてまつったことはありません。どうして、そのように神々しく輝いておいでになるのでしょうか」と聞きます。

それに対して、釈尊は、

「阿難よ、よく気が付いてくれた。私は今、この上ない如来の心に達し、心が喜びに満ちあふれている。これからそのことを詳しく説くから、よく聞くがよい」と言って、法蔵菩薩の物語（大無量寿経）を説きはじめられた。

このこと一つが、大無量寿経が真実の教であることの証として、教巻には書かれています。

考えてみると、私たちは、夢や希望がなくては生きていけません。いろいろあるでしょう。それに向かって、努力をすることは生きる力であり、苦難を克服していく忍耐にも繋がっています。そしてその願いがかなえられたところに喜びや幸福を感じることができる。

しかし、途中で挫折したり、遂げられないことへの絶望や、叶えられても空しさを感じるのもまた私たちです。

私が、住職を養成する学校にいた時、五十半ば過ぎの男性がいました。若い人が多いなか、その方だけ年をとっていたので印象に残っています。在家出身の東京の方です。

戦後間もなく地方から東京へ出てきて、事業を起した。東京で事業を成功させて、自分の家を建てるというのがその方の夢だったそうです。遊びたいのを我慢し、酒もたばこも我慢して、一生懸命働いた。長年の努力の甲斐があって、ようやく事業は成功し都心に自分の家を建てることができた。うれしくて仕方がなかった。毎日座敷に寝そべって、喜びをかみしめていました。ところが、何日かして座敷で大の字になって天井を見上げていると涙が出て止まらなくなったそうです。自分の人生は何であったのか。確かに都心に家を建てることは大変なことである。しかし、自分の人生はこの家を建てるためだけのものであったのか。このまま年老いて死んでいくのか。そう思ったら悲しいやら空しいやら、涙が止まらなかった。

そんな時に、親鸞聖人の教えに出会ったそうです。この教えしかない。それで弟さんに会社を譲ってお坊さんになったということを聞きました。

ここまで一途な人は稀でしょうが。それでも、私たちは、老病死の事実から逃れることはできません。その事実に出会ったとき、私たちの夢や希望は、大抵の場合空しいものになってしまう（裏面に続く）

（中面からの続き）　のではしないでしょうか。

釈尊は、老病死を苦としか受け取れない身の事実から、悟りを開かれた。そして、釈尊は老病死の身でありながら、いのちが輝く世界を見出してくださったわけです。そのことを私たちに分かりやすく法蔵菩薩の物語としてお説きくださいました。

法蔵菩薩が建立された阿弥陀仏の浄土は、自分の心から自己中心的な心を取り除き、一人ひとりのいのちが平等輝き尊重される社会であると説かれています。

念仏申すということは、法蔵の願いを私の願いとして生きていくということです。

自分の夢や希望が、他の人のためや社会のためになるという、何か法蔵の願いに通ずるものがなければ、真にいのちを輝かせることはできないのではないでしょうか。法蔵の願いに出会ったときに、私の真の願いはそうであったのかと私のいのちが感動するのでしょう。

親鸞聖人は、人をして真に輝かせるものこそ真実であるということを、釈尊の「光顔巍巍」に見て取られたのではないかと思います。

私にとって一番大切なのは、死をも乗り越えていける私の願うべき願いを明らかにし、生きる意味と輝きを見出すことではないでしょうか。

（文責住職）

食前のことば　（合掌）

○ 多くのいのちと、みなさまのおかげにより、このごちそうをめぐまれました。

（同音）深くご恩を喜び、ありがたくいただきます。

食後のことば　（合掌）

○ 尊いおめぐみをおいしくいただき、ますます御恩報謝につとめます。

（同音）おかげでごちそうさまでした。

食事のことば

「食事」をいただく時に、わたしたちは何を思い、どのような思いをいだいているのでしょうか。

「食」それは「多くのいのち」をいただいています。

「食」そこには「みなさまのおかげ」がありました。

「食」仏さまの「ご恩」を深く喜ぶことができます。

「食」「慚愧（ざんぎ）」と「歓喜（かんぎ）」の心でもって「仏恩報謝（ぶっとんほうしゃ）」につとめてまいりましょう。

食事の際に一人ひとりが「ご恩」を味わえるように、新「食事のことば」ができました。

従来から親しんでこられた方も、いままであまり口にされてこなかった方も、この新「食事のことば」を自ら声に出して、深く尊い「ご恩」を喜ばせていただきましょう。

（本願寺リーフレットより）